

DV被害者が暴力関係から「脱却」するプロセスを支える「自己」とその変容

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程 増井 香名子(7166)

山中 京子(大阪府立大学人間社会学部・4129)

児島 亜紀子(大阪府立大学人間社会学部・2765)

キーワード：DV被害者・暴力関係からの「脱却」プロセス・自己の変容

1. 研究目的

本研究は、DV被害者が「暴力のある生活」から「暴力のない生活」に状況を大きく変化させるという暴力関係から「脱却」するプロセスを下支えする自己に着目し、被害者の自己の感覚やその自己を取り巻く経験を明らかにすることが目的である。

2. 研究の視点および方法

多くの先行研究において、DVの被害者が繰り返し暴力にさらされることにより、被害者は「学習性無力」に陥り、暴力から逃れることが困難になることを明らかにしている。一方で、暴力関係から「脱却」し、「暴力のない生活」を獲得した被害者が存在する。つまり、その被害者らはDV被害によりもたらされる「学習性無力」を克服し、自らの状況を大きく変化させているといえる。本研究では、被害者が「暴力のある生活」から「暴力のない生活」へ状況を変化させるプロセスに影響を与え、またプロセスの中で変容する被害者の自己に着目する。

本研究では、過去にDV被害経験を有し、既に加害者とは離別して新しい生活を始めている7名の女性を対象に半構造化面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。

3. 倫理的配慮

本調査は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づき実施した。調査協力者には、事前に調査について口頭および文書にて十分に説明を行い、調査協力への同意を得た。個人情報はずべて匿名化し、調査結果の公表過程において個人が特定されないことがないように配慮し、調査協力によって協力者の安全が脅かされることがないように最大限の注意を行った。なお、本研究は大阪府立大学人間社会学研究科において研究倫理審査を受け、承認を得た。

4. 研究結果

被害者は、暴力下の生活で<自己の奪われ>を経験するが、その一方で<生き続けている自己>が存在し、暴力関係からの「脱却」のプロセスを大きく下支えしていた。そして離別の決意や行動化の局面で<超自己の感得>を得ていた。さらに、被害者は行動化のプロセスの中で<自己のよみがえり>を実感する。

生成した<カテゴリー>および『概念』を用いて分析結果を以下に示す。

(1) <自己の奪われ>

被害者は、暴力下の生活の中で『自己封鎖・無力感』、『孤立化・孤独感』、『希望なし状態』という著しい<自己の奪われ>を経験していた。

(2) < 生き続けている自己 >

< 自己の奪われ > に対抗する形で被害者は < 生き続けている自己 > を内在させ保持していた。 < 生き続けている自己 > を説明し相互の影響を与える概念として『肯定的自己原型』、『暴力への拒絶感・違和感』、『二人ワールドの回避』の3つが見いだされた。『肯定的自己原型』とは、生育歴や生活歴の中で培われ暴力下においても何とか保持され続けた自尊感情や自己肯定感のことである。これは、暴力下の被害者に『自己喪失恐怖』をもたらす被害者に限界感として現状を続けることへの警告を与える。『暴力への拒絶感・違和感』は、暴力を甘受する一方で、暴力に対する本能的な抵抗感やどうしても納得しきれないという感覚を抱くことである。 < 生き続けている自己 > を肯定的に支えているのが、『二人ワールドの回避』である。暴力下の生活の被害者は加害者の「二人ワールド」の中で孤立化し無力化されるが、かろうじて他者や社会とのつながりが保持されていることが被害者の自己を奪われていくことを間接的に緩和させていた。

(3) < 超自己の感得 >

被害者は離別の決意や行動化をする局面で、『希望がみえる』経験や『スピリチュアルな存在からの守られ・背中押され感』を得ていた。これらは被害者自身が自己を無意識に活性化させ、ハイヤーパワーともいふべき超越的な存在の感得を受けていたともいえる。

(4) < 自己のよみがえり >

被害者は、暴力関係から「脱却」するプロセスの中で『作用主実感』、『内的エネルギーの湧き上がり感』、『バウンダリーの設定』、『有援感』を感じ、 < 自己のよみがえり > を経験していた。『作用主実感』とは、自分が動いたことにより自身が状況を動かすことができた、できるのだという実感のことである。『内的エネルギーの湧きあがり感』とは、離別に向けた行動化に伴い、自分自身の内部から湧き出るようにあふれてくる力とその感覚のことである。『バウンダリーの設定』とは、加害者や加害者との関係を客観視し始め、加害者との一体感から感情的あるいは物理的距離を置き始めること、および関係への引き戻しを図ろうとする周囲に対しても自分の決意を貫くことである。『有援感』とは、味方となる他者を獲得し、その存在があることで安心や心強さを感じることである。暴力下の生活において、孤立化し孤独感を抱いていた被害者にとって決意行動をつないだ他者存在を獲得することは、『有援感』を得ることにつながっていた。

本研究の結果から、「暴力のない生活」を希求し下支えする源は < 生き続けている自己 > であり、被害者は暴力関係から「脱却」するプロセスの中で自己への感覚や認知を大きく変容させていることが明らかになった。さらにその変容は、被害者の「自己 他者」関係の経験と認識に深く関連していた。つまり加害者との生活の中で「侵襲的な他者」により自己が破壊されそうになった被害者は、他者とのつながり保持の下かろうじて自己を生き続けさせ、局面で自己の中に「超越的な他者」を自ら見出すことで行動化へと進み、そして「侵襲的でない他者」に出会うことで暴力関係から「脱却」を可能とするのみならず、自己をもよみがえらせていた。